

# 1 むらづくりの主体

(1) 名称 ふくしまたなだほぞんかい たなだ さと さんべ 福島棚田保存会「棚田の里 三部」

(2) 所在地 ながのけんいいやましおおあざみずほふくしま 長野県飯山市大字瑞穂福島

(3) 地区の規模 集落

(4) 組織の性格 機能的な集団等

(5) 代表者の氏名、役職及び住所

氏名 まるやま ふくじ 丸山 福治

役職 会長

住所 ながのけんいいやましおおあざみずほ 長野県飯山市大字瑞穂 2 1 8 6



白地図KenMapの地図画像を編集

# 2 地区の概要

総人口	農(林、漁)業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
190人	70人	58戸	76ha	13ha	- ha	68ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第 種兼業農家	第 種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
38戸	21戸	4戸 (19.0%)	1戸 (4.8%)	16戸 (76.2%)	4戸 (19.0%)	6戸 (28.6%)	11戸 (52.4%)
地域指定状況				農業地域類型区分			
豪雪地帯特別豪雪地域(昭和37年) 農振指定(昭和45年) 特定農山村地域(平成5年)				市 町 村		当 該 地 区	
				中間農業地域		中間農業地域	

### 3 むらづくりの背景・動機

飯山市の水田は、主に市中央部を流れる千曲川周辺の平地に広がりを見せている。中山間地域においても大部分が基盤整備されてきたが、小さな棚田が連続している。

飯山市の中央を南北にゆったりと流れる千曲川の東側に瑞穂地区があり、11集落で形成されている。そのうちの福島集落は、総人口190人、総世帯数58戸のうち農家は38戸で、主に水稻、菌茸栽培中心の典型的な中山間地域である。

かつては、養蚕や紙すきも盛んであったが、産業構造の急激な変化により、兼業化、離農する者が続出し、農業従事者の48.5%は65歳以上で、後継者不足に悩まされており、集落内の耕作放棄地も163aと農地全体の9.1%となっている。

瑞穂地区では、瑞穂の郷づくり委員会が発足し、平成10年には、各集落の足元を見直し、地域資源として活かしていこうという「新みずほの国づくり構想」を打ち立てた。

福島棚田は近世以来の歴史のなかで、味の良い米の産地、酒米の産地として知られていたが、近年では、山間部特有の低水温や日照時間不足、水利条件の悪さに加え、生産調整や、耕作不利条件による採算割れ、高齢化や後継者問題の深刻化等により、棚田の荒廃化が問題となっていた。

このようななか、福島集落では、丸山福治氏を筆頭に地元の有志14人が集まり、荒廃化した棚田を復活させて地元にかつての活気を取り戻したいとの思いから、平成10年に福島棚田保存会「棚田の里三部」を結成し(現在は26名(うち女性は11名))、平成11年には、荒廃化した棚田90aのうち45aを復活させた。



保存会による復田作業

このような、熱意ある棚田の復活、保全への取組が実を結び、平成11年7月には、農林水産大臣より「日本の棚田百選」に認定された。

同保存会は、現在、棚田の保全を軸としたむらづくりを進めており、グリーンツーリズムや観光等への展開を図るなど、飯山市観光協会等と連携した取組を推進している。

### 4 むらづくりの内容及び成果等

#### (1)水、土、地形による問題の克服

福島集落(福島新田)の棚田の用水確保については、山間部からの雪解け水により、春先から田植えの時期までは確保できるが、それ以降は慢性的な用水不足となるため、水の確保に苦労してきた。また、土型水路であるために、法面の崩落や浸食が繰り返され、管理に多大な労力を費やし、土を掘れば石が多く排出されるため、保水力がなく、崩れやすいという欠点があった。

これらの課題を解決するために、平成13年度から「県営ふるさと水と土ふれあい事業」に取り組み、深井戸や親水水路を整備し、平成15年度には、深井戸から汲みあげた用水を貯水できるため池(親水ため池)が完成し、田植え以降の慢性的な用水不足を解消できた。

### 【 成果等 】

雪解け水を、一度親水ため池に溜めて利用することにより、水稻栽培に不適切な冷たい水を利用している問題の解消が図れた。

平成16年度の夏の干ばつ時には、ため池の用水のおかげで、無事稲刈りシーズンへつなげることができた。

「県営ふるさと水と土ふれあい事業」に取り組むにあたっては、棚田保存への地域住民の強い思い入れが、合意形成を円滑に進める原動力となり、中山間地域等直接支払制度を活用して地元負担に充てている。

### (2)施設等の充実に向けた取組

福島棚田保存会「棚田の里 三部」の取組により棚田は復活したが、イベントの際には市内外から多くの人を訪れるようになり、施設の充実や棚田の維持管理が必要不可欠となった。しかし、平坦地に比べ、棚田での農作業は労力がかかり、受益戸数の少ない福島集落では草刈機等を購入するのにも大きな出費であった。

そのようななか、平成12年には、県単事業の「ふるさと棚田支援事業」により、草刈機などの棚田の維持管理に必要な資機材を購入し、また平成13年度には「県営ふるさと水と土ふれあい事業」により管理道路、水路を整備して、日常の維持管理作業の負担軽減を図り、さらに、同事業により平成14年に完成した三部休憩所は、棚田、水路の維持管理作業時の休憩場所や、保全活動参加者等との交流拠点としている。そのほか、同じ平成14年には、福島地区の玄関口に水車を復活させ、昔ながらの棚田が残るこの地域のシンボルにした。

### 【 成果等 】

福島集落では、同保存会の女性部を中心に、イベント参加者や観光客等をもてなす体制ができており、三部休憩所においては、地元で採れた野菜や山菜等を販売したり、地元産そば粉を用いた手打ちそばを提供したりして、大変好評を得ている。このように、地産地消を推進し、地域住民が一体となって都市住民等との交流を行い、地域の活性化につなげている。

かつて福島集落は、内山紙の生産が盛んで、その紙すきに水車が利用されていたが、現在、機械を入れて整備できない棚田では、そばを栽培して水車で挽いている。時代の流れとともに姿を消してしまった水車は、景観への配慮だけではなく、三部休憩所での交流にも役立っている。

### (3)田植え、稲刈り体験

平成11年から始まった「田植え、稲刈り体験」は、長野県各地や県外から100数名の人が訪れる人気イベントに成長した。泥んこになりながらも田植えを行うなど、地域のコミュニケーションの場になるとともに、都会では味わえない体験ができるということで、都会からの参加者にも大変好評である。



国際交流員との交流

#### 【 成果等 】

毎年5月下旬の田植えイベント及び9月下旬の稲刈りイベントへの参加者は、県内外からの参加があり、年々増加している。

- ・ 30人(平成11年) 150人(平成16年)
- ・ 過去6年間で、延べ1,620人が参加。

国際交流員は、欧米文化とは違った日本の稲作文化を体験し、また、地域住民も、諸外国の若者と国際交流ができるよい機会となっている。

### (4)地元小学校等の農作業体験学習

棚田は、地元小学校(飯山市立東小学校)の農作業体験学習の場としても活用されており、各学年が田んぼを一枚ずつ分担し、田植えや稲刈りを行っている。

平成12年5月には、地元長野県立飯山照丘高校の総合学習として、生徒20人が棚田での田植えを行って地域についての理解を深め、平成14年5月には、筑波大学付属駒場中学校の1年生120人が棚田で田植えを行い、貴重な体験をしている。

都会の子供を受け入れることは、飯山市が力を入れているグリーンツーリズム事業の体験メニューの1つとして、大きな可能性を感じさせている。



農作業体験学習

### 【 成果等 】

16年度も、64校が農業体験や自然体験等を行っている。

平成16年10月からは、地元東小学校の生徒たちが植えて収穫したお米が、全量、給食米として用いられ、生徒たちに好評を得るとともに、地産地消や食育等を推進するうえで、絶好の場所・教材となっている。

### (5)新たな観光資源に

福島新田の棚田は、石垣が積みあげられた美しい棚田である。この風景を求めて、多くのアマチュアカメラマンが、福島新田の棚田を訪れている。また、映画「阿弥陀堂だより」等の舞台にも選ばれ、公開後には阿弥陀堂を訪れる観光客が相次いでいる。

春のゴールデンウィークには、約9万人の観光客が訪れる、飯山市の一大イベント「いよいよま菜の花まつり」の開催にあわせて、周遊バスが運行され、「福島新田の棚田」と「阿弥陀堂」を目当てに、都会から多くの観光客が訪れている。



田植えの後の棚田

### 【 成果等 】

飯山市の春の観光を支えるとともに、北信州地方の広域観光の一翼を担うようになっている。

# 【むらづくり推進体制】

